

保育現場との連携活動による保育者養成の実践的教育と地域貢献

—身体運動に関する指導および支援活動を通して—

池田孝博*

要旨 近年、地域社会への貢献は、大学の大きな使命のひとつに位置づけられている。しかしながら、その活動について検証した文献は少ない。本研究の目的は、福岡県立大学の専門教育として行われている保育者養成教育と田川市立幼稚園における身体運動に関する指導・支援活動について検証することである。この連携活動に参加した学生と幼稚園の教員および園児の保護者を対象に調査を実施した。その結果、体力・運動能力測定、運動会の練習支援および本番のお手伝い、朝の運動遊びの連携活動は、学生の専門教育として十分な効果的をあげていることが確認された。また、幼稚園の教員による評価においても、学生の活動が子どもたちの保育活動に良い影響を与えていることが確認された。さらに、保護者の評価では、連携活動に対して高い認知度が認められ、その評価も高いことが確認された。よって、これらの活動は、大学から地域社会への貢献だけでなく、大学教育に地域が貢献している「双方向モデル」の事例になると考えられる。

キーワード 地域貢献、保育者養成教育、幼児教育、運動能力測定、運動会、朝の運動遊び

1. 緒言

文部科学省の中央教育審議会による「新しい時代における教養教育の在り方について」（中央教育審議会，2002a）の答申では、大学におけるカリキュラム外の新しい教養教育が強調され、その一つとして、国内外でのボランティア活動、インターンシップ（就業体験）が取り上げられている。さらに、「青少年の奉仕活動・

体験活動の推進対策について」の答申（中央教育審議会，2002b）では、学生の自主的ボランティア活動が単位化やその活動のための環境整備を行うことが求められている。また、2005年の答申である「我が国の高等教育の将来像」の中では、従来の大学が担ってきた「知の創造（研究）」「知の伝達（教育）」に加え、新たに第3の使命「知の実践（地域貢献活動）」が位置づけられている（中央教育審議会，2005）。近年

* 福岡県立大学人間社会学部・教授

では、文部科学省によって、高等教育機関における地域社会と連携した教育の推進、インターンシップ（就業体験）の推進、産業連携による教育プログラムの開発・実施といった、大学等と地域社会・産業界との連携・協力による教育の充実を図るための支援が行われている。また、2012年には、地域で起こる社会的問題や生活課題に対して大学の知の実践力の発揮を目指す、「大学改革実行プラン：社会変革のエンジンとなる大学づくり」が発表され、その中では、「地域再生の核となる大学づくり」としてCOC（Center of Community）構想の推進が掲げられている（文部科学省，2012）。このように、現代の大学には、その使命として社会貢献が求められているが、大学自身の内憂的な問題意識として、少子化による定員確保の問題も指摘されている（田中ほか，2008；伊藤・小松，2006）。

このような大学を取り巻く情勢の中で、すでに大学等の高等教育機関によって実施されている社会貢献活動は、多種多様かつ膨大な数に昇ることが予想される。しかしながら、国立情報学研究所（NII, National Institute of Informatics）が運営する学術論文や図書・雑誌などの学術情報データベースであるCinii

（Citation Information by NII）を用いて、「大学」「地域（社会）貢献」「子ども」などのキーワードを組み合わせて検索したところ、それらの取り組みに関する効果や問題等について検証している文献はあまり見られなかった。その少ない文献の内容について精査した結果、地域の子どもたちへの教育的貢献活動に関する論稿として表1のような6つの取り組み（大西・保坂，2013；水野・佐伯，2012；新宅，2010；田中ほか，2008；八木ほか，2002；山中・石橋，2004）が確認された。これらの取り組み内容は、理科教育が2件で、その他は食育、幼児教育、体力測定、交流などを目的としたものが各1件であった。また、活動形態は高等教育機関に勤務する教員および研究者が子どもに対して実施するものが4件、学生が子どもと関わるものが2件であり、学生による関わりはボランティア教育の範疇にあるものであった。なお、取り組みの対象となる子どものうち、幼児を対象としたものは3件、小学生・中学生を対象としたものは2件で、1件は幼児と小学生を対象としていた。これらの内容は、いずれも大学等から地域の子どもの一方通行的な関与である。また、その活動が大学生への教育的要素を含んでいる場合であっても、それはボランティア教育の範

表1 文献に示されている大学等が行っている地域貢献活動

文献	対象	内容	形態	活動の方向性*	学生教育
八木ほか（2002）	小・中	理科	イベント	R・T→C	—
水野・佐伯（2012）	幼	食育	出前	T(R)→C	—
山中・石橋（2004）	幼	公民館活動	ボランティア	S→C	○
田中ほか（2008）	小	理科	出前	R・T→C	△（補助）
新宅（2010）	幼	測定	出前	R・T→C	—
水野・佐伯（2012）	幼	食育	出前	T(R)→C	—
大西・保坂（2013）	幼・小	体力向上・交流活動	ボランティア	S→C	○

※R：研究者、T：教員、S：学生、C：子ども

疇にあり、専門教育に関わるものは見られない。

本研究では、大学側からの地域への貢献活動と、その貢献活動を通じて現場で得られる専門教育に関する効果という、双方向モデルを構築し、その検証を試みた。福岡県立大学（以下、本学と略す）が位置する福岡県田川市においては、2014（平成26年）4月より伊田幼稚園と後藤寺幼稚園の市立幼稚園2園、中央保育所および子育て支援センターを一体化させた「たがわこどもセンター まいまい」（以下、こどもセンターと略す）が開設された。こどもセンターの開設に際しては、本学との一層の連携強化が謳われているが、連携活動を充実させていくためには、これまでの取り組みを総括する必要がある。そこで、本研究では、保育現場での保育者養成に関する実践的教育と、そのような取り組みの地域への貢献度について検証し、今後の本学における教育研究および地域貢献活動について考えるための一助としたい。

II. 連携活動による教育実践の概要

1. 幼児の体力・運動能力測定

幼児の体力・運動能力測定は、例年、1学期（6月）の平日午前中の保育時間を利用して実施している。伊田幼稚園については本学の体育館、後藤寺幼稚園は後藤寺小学校体育館を測定会場として設定した。測定作業は、本学人間社会学部人間形成学科こどもコースの4年生の池田ゼミ生および希望者によって実施されている。テスト項目は、幼児への教育的な配慮から、小学校に入学後に実施される文部科学省「新体力テスト」に準拠した項目や、幼児に関する発育発達研究において一般的に用いられる項目を採用している。実際の測定は6項目で、そのう

ち「握力」「長座体前屈」「立ち幅跳び」は、小学生と同じ方法で実施している。また、幼児の発育状況を考慮して「ボール投げ」については、小学生が用いるソフトボールと大きさが同じで軽量であるティーボール用のボールを用いた。「反復横跳び」は小学生以上に適用される3本ラインによる方法ではなく、10秒間内に2つのマットを左右に交互に跳ぶ回数を測定する方法を採用している。また、走力（走技能）については、天候を考慮した室内での測定であり、直線距離を確保することが難しいため、3mの間隔にひかれたラインを3往復するタイムを測定する「ポテトレース」を実施している。測定を実施する学生には、予め、一般的な体力・運動能力測定についての留意する点や、特に幼児の測定に関して配慮する点についてミニレクチャーを受講させる。なお、得られたデータは、池田ゼミの学生の卒業論文の作成において活用している。これまでは、リズム能力、睡眠行動および身体活動量との関連を検討する際に用いた。また、幼児および家庭に対しては、家庭における子育て・遊びへの活用や、発育発達の確認を目的として、個人用の記録カードを作成してフィードバックを行っている。さらに、幼稚園に対しても、保育内容の検討や子どもへの関わる際の教育資料として、全体のデータを提供している。

2. 運動会

例年、田川市立の両幼稚園では10月中旬に運動会が実施されている。運動会では幼児個人の運動技能を披露する演目や団体種目が設定されており、運動に関する専門的な指導が必要とされる。そこで、この取り組みでは両幼稚園における指導内容のニーズを確認し、本学において

「体育Ⅰ」および「体育Ⅱ」を履修している学生による、運動会のための幼児の練習支援を実施している。なお、この支援活動においては学生の学習段階に対応させるため、「体育Ⅱ」の履修学生（標準履修年次3年）は指導計画（指導案）を作成して、実際に子どもたちへの運動指導を行い、「体育Ⅰ」の履修学生（標準履修年次2年）はその補助を行っている。平成25年度における実績は、後藤寺幼稚園では年長児（5歳児）に対して、縄跳び（走り縄跳び）、ボール操作（ドリブル、投げ上げ・キャッチ等）、年少児（田川市は平成25年度まで2年保育であったため4歳児）に対してはマット運動（前転）、フラフープ操作（転がし、回し）の指導を実施した。また、伊田幼稚園では主に年長児を対象に、マット運動（前転）、鉄棒（前回り下り）、縄跳び（走り縄跳び）および組体操の指導を行った。指導時期と回数は、それぞれ9月における午前の保育時間中に1時間程度、それぞれの園で6回にわたって実施した。

運動会の本番については、学生による演目への出場、園児の誘導および運動器具の運搬（場面設定）を主な役割として参加した。実施学生は、「体育Ⅰ」の履修学生である。通常、幼稚園の運動会におけるこれらの業務は、園職員や保護者会役員によって実施されているが、職員数の問題から人手が不足する状況や、役員の保護者が自分の子どもの演技などをみられない等の問題から、学生への参加が要請された。運動会は、幼稚園における重要な行事のひとつであり、かつ運動指導に大きく関わる行事である。保育者を目指す学生にとっては、このような行事に実際に参加し、それを体験することの教育的な意義は非常に大きいと思われる。そこで、体育Ⅰの学習として、運動会本番への参加とい

う学習内容を設定した。

3. 朝の運動遊び

近年、幼児の身体活動量は極端に少ない子どもとそうでない子どもに二極化することが報告されている（加賀谷，2008）。さらに、身体活動量が多い幼児の運動能力は高いことも示されている（田中，2009）。また、埴（2011）は、子どもの歩数に関わる季節要因について検討しており、1月に比べて6月の歩数が有意に多いことを報告している。さらに、杉浦ほか（2012）による幼児を含めた調査でも、秋冬に比べて、春夏の歩数が多いことが示されている。両幼稚園では、子どもたちの冬場の登園時刻が遅くなることや、園内保育中も室内活動が中心となり、外で積極的に身体を動かして活動しないことが憂慮されていた。そこで、3学期の朝、登園から保育開始までの時間を利用して、屋外の遊びを9—10時の1時間実施した。なお、この取り組みにあたっては「朝の運動遊び」への参加を促すよう、幼稚園から家庭に対して呼びかけを行った。朝の時間に運動遊びを行うことは、子どもに覚醒効果が認められるなど、その日1日の活動に対して良い影響を及ぼすことが報告されている（古田ほか，2002；小林・野井，2012）。そこで、「体育Ⅱ」履修学生は授業の中で、子どもが楽しく活動できるような遊びを計画・実施し、その内容の振り返り行う学習内容に取り組んだ。

Ⅲ. 教育実践および連携活動に対する評価

1. 学生による評価

平成25年度の体力・運動能力測定作業を行った後に、これに参加した学生19名について対し

て、活動の振り返りの調査を無記名方式で実施した。その結果を、図1に示している。「測定方法（データの取り方）の理解（Q1）」について、「少し役に立つ」および「役に立つ」と肯定的な回答を行った学生は、94.7%であり、「役に立たない」「あまり役に立たない」の否定的な答えは見られなかった。また、「幼児の運動能力レベルの理解（Q2）」については、肯定的回答が89.5%に達し、否定的回答は見られなかった。また、測定作業を経験に基づいて「幼児期に運動能力測定は必要か（Q3）」について、「そう思う」または「少しそう思う」と回答した学生は89.5%、「保育者として測定能力を身につけることは必要か（Q4）」につい

ても94.8%の学生が、その必要性を自覚していることが示された。

図2は、運動会の練習および本番のお手伝いを行った平成22年以降の体育I履修者（2年生）125名に対して、それらの活動経験に対する将来保育者を目指す自分にとっての有益性を「とても役に立った」から「役に立たなかった」までの5段階で尋ねた結果を示している。この調査も無記名方式で実施した。「幼児の運動能力の理解（Q1）」については98.0%、「幼児の運動に対する態度の理解（Q2）」では92.8%、「幼稚園の運動指導の実態についての理解（Q3）」は91.2%、「保育者に必要とされる運動能力の理解（Q4）」については84.8%の学生が、

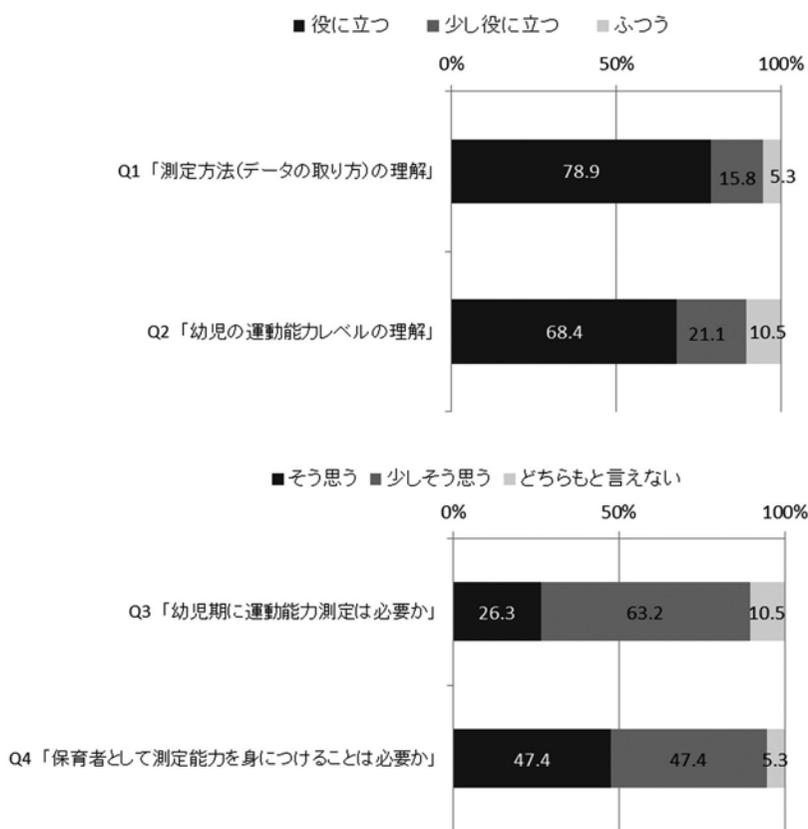


図1 幼児の体力・運動能力測定に関する学生の振り返り評価

「とても役に立った」「役に立った」と回答した。また、図3には、運動会練習における運動技能の指導や3学期に朝の運動遊び実践を行った平成22年以降の体育Ⅱ履修者（3年生）19名に対して、やはり無記名方式で、指導・支援活動の有益性について5段階による回答を求めた結果を示している。「幼児と一緒に活動する方法（Q1）」「声かけやアドバイスの仕方（Q3）」については100%、「運動の発達段階に応じた関

わり方（Q2）」は88.9%、「保育計画の立て方（Q4）」は72.2%の学生が、「とても役に立った」「役に立った」と回答した。

なお、学期末に全学的に実施される授業評価アンケートでは、「そう思う」から「そう思わない」までの4段階で回答を求めているが、平成25年度の体育Ⅰの総合評価「この授業は総合的に満足できるものであった」は4点満点の3.9、体育Ⅱでは3.8を示した。なお、自由記述

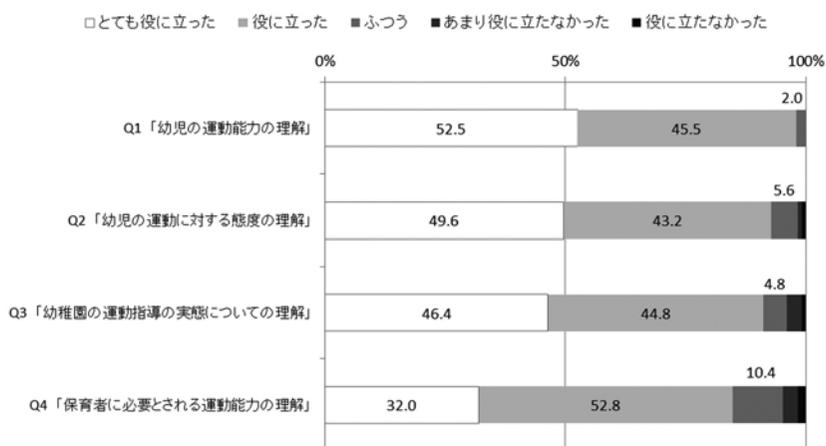


図2 体育Ⅰ履修者の学習内容に対する振り返り評価

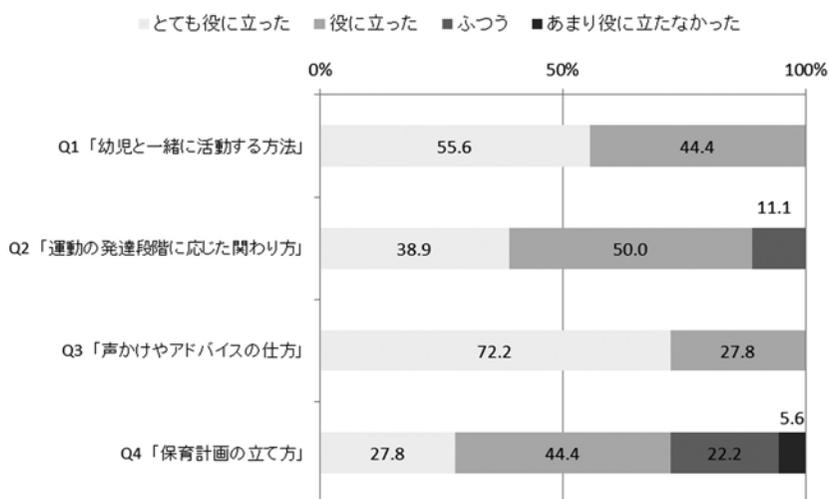


図3 体育Ⅱ履修者の学習内容に対する振り返り評価

表2 体育I履修者の授業評価・自由記述欄コメント（全文掲載 下線引用者）

- ・今まで出来なかったことが出来るようになって嬉しかったです。友達に教えることで子どもたちへの教え方も学びました。
- ・子どもたちに指導するという貴重な体験が出来てよかったと思いました。20年間でこれで体育が終わりだと考えると悲しいなと感じました。
- ・授業を通してできるようになったことが多かった。
- ・実際に幼稚園に訪問したことで、子どもたちに教える難しさを知ることができてよかった。
- ・運動会のお手伝いは、とても良い経験になりました。授業の内容も、適切であったと思います。とてもためになりました。
- ・説明もすごく分かりやすく、聞きとりやすかったので良かった。
- ・とても楽しい授業でした。ありがとうございました。
- ・できなかったことができるようになり、幼児への指導方法を学びました。
- ・毎授業とても楽しく参加できました。指導のポイントなど、詳しく教えていただいたのはとても良かったです！
- ・実際に幼稚園に出向き、勉強できたことが良い経験になった。
- ・楽しかったです！

欄に記載された評価コメントのすべてを表2に示している。このコメントからは、実際に現場で幼児と関わることに對する評価が高かったことが窺える。

2. 幼稚園の教員による評価

学生に対して保育現場で実践的な活動を行うことが、保育者養成教育としての効果だけでなく、同時に地域に貢献しているかを検討するため、両幼稚園の教職員を対象に調査を行なった。調査は平成25年2月に実施し、対象となった教職員は8名であった。

この質問紙では、体力・運動能力テストについて、「テストの結果は保育内容に反映させられるものですか」「テストの結果は子どもの理解に役立ちますか」、運動会の練習および本番のお手伝いについて、「学生の支援による幼児への練習効果がありますか」「練習支援は普段

の運動会練習に役立ちますか」「お手伝いは運動会の子どもへの教育効果を向上させますか」「お手伝いは運動会の行事を活性化させますか」、朝の運動遊び支援について「朝の運動遊びは子どもへの教育効果がありますか」「朝の運動遊びは日常の保育に役立ちますか」の質問について、「はい」「いいえ」「どちらともいえない」の3つの選択肢で回答を求めたところ、その回答はすべて「はい」であった。また、「園児の体力測定の取り組みをどう評価しますか」「(運動会の)練習支援の取り組みをどのように評価しますか」「(運動会本番の)お手伝いの取り組みをどのように評価しますか」「朝の運動遊びの取り組みをどう評価しますか」の質問について、「良い」「まあ良い」「どちらともいえない」「あまり良くない」「良くない」の5つの選択肢で回答を求めたところ、その回答はすべて「良い」であった。また、表3に、4つの活

動への評価に関する具体的なコメントと「今後の県大と新園（名称決定前のこどもセンターの呼称）の連携活動について、何かご意見がございましたら、ご自由にお書き下さい」に対する回答を示している。これらのコメントからは、学生が保育現場に出て学ぶことが、子どもの保育に対して良い影響を与えていることが窺える。つまり、学生の保育現場での実践的教育は、地域の子どもたちの育ちについて貢献できていると考えられる。

3. 保護者による評価

学生が保育現場で実践的学習を経験することに対する保護者の評価を検証するため、平成25年度に2つの幼稚園に在園する園児の保護者を対象に調査を行なった結果、63の家庭から回答を得た。図4に「体力・運動能力測定」「運動会練習支援」「運動会本番お手伝い」「朝の運動遊び」の4つの連携活動に対する認知度をたずねた結果を示している。4つの活動を知っているかどうかについては、体力・運動能力テストと運動会練習支援が95.2%、運動会本番お手

表3 教員による連携活動に対する評価（自由記述のみ抜粋）

<p>園児の体力測定の取り組みをどう評価しますか。また、それはどのような点からですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体力測定の結果を見て遊びをどのように発展させたらよいか参考にできた。子ども達の現在の実態がわかった。 ・子ども個人の体力や苦手の運動・基本的な運動動作などの測定により知ることができ、その子の今後の運動目標が見えてくると思う。また職員にとってはその結果を見ながら不足している運動遊びを取り入れていきたいと考えている。 ・子どもたちが苦手なところを一斉体育の中で個別指導できるボール投げをかなりした。 ・園児の運動を体力測定で見ると不足している運動がわかる。そのことにより園で遊びの中で不足分を補充していける。個人の能力の高さを知ることができる。 ・年齢に応じた運動能力が育っているか等がわかりまたその評価を見ることで育っていないところを補うような遊びを取り入れられる。 ・測定でしかわからない子ども達の状態がわかり、子ども達の機能を伸ばしていく材料となる。 ・子ども達の体力がどれくらいなのかかわかったし、保育で一人ひとりの関わり方を知るきっかけになる。 ・どの子がどれくらいのことが出来るのか、日頃の保育ではわからないことも知れた。
<p>(運動会の) 練習支援の取り組みをどのように評価しますか。また、それはどのような点からですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体指導の中で細かいところまで指導していただき個人個人目を配っていただける。 ・基本的な運動動作（投げる時にはどの部分を使って投げたらよりよく飛ぶか？）（組体操の流れや動作）を職員も学ぶことができる。 ・縄跳びなどどうしたらうまく飛べるようになるかを先生方の指導を見させてもらって保育に取り入れることができるから。 ・マット、鉄棒、縄跳びなど、個別別指導が必要な運動であるため学生さんたちの手助けが助かる（危険や安全の確保が必要だが）。池田先生のステップを踏んだ指導が教師（私）の力量を高めるのに参考になる。 ・なわとび、ボール、マット運動など指導の仕方を具体的に教えてもらえること。園児たちも先生や学生さんとの触れ合いを楽しみにしている。 ・いつもと違う人から違った方法で教えてもらい、子ども達の励みになる。 ・クラス担任ひとりではできないことも支援していただき充実した練習ができたと思う。子ども一人ひとりの支援の仕方のきっかけとなり成果にもつながった。 ・一人では出来ないこともこの支援のおかげで充実した練習になった。とても助かりました。

(表 3 つづき)

<p>(運動会本番の)お手伝いの取り組みをどのように評価しますか。また、それはどのような点からですか。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・プログラムがスムーズに進行できる。要所要所についていただけるので助かっています。 ・学生が子どもたちを意識しながら声をかけたり援助したりする姿が見られ、その中で子どもの姿（練習した時より成長している）を見て感動したりする学生もいる。このことについては学生にとって大切なことだと思う。保護者（役員）の指示にも「ハイ」と返事をしてよく動いている姿が見られ職員も大変に感謝しています。 ・組体操の時や競技の時に手伝ってもらい当日の子ども達にゆとりをもって関わる事ができた。 ・委員さんにご手伝っていただくことが多いため、学生さんのお手伝いがとても助かる。また田川にある大学の学生さんの力が田川の地に活かされることがとてもありがたいと感じている。“学生”という大きな人が子ども達のあこがれの人の一人になると思う。 ・道具の出し入れ等テキパキと手伝ってくれ大変助かっています。それとたくさんの声援と拍手などで園児たちのやる気を盛り立ててくれます。 ・保護者のお手伝いを減らせて子ども達の演技に集中することができて助かってます。また若いエネルギーを感じて楽しませてもらっています。 ・子ども達と一緒に競技に参加していただいたり、子ども達を励ましていただきみんな大喜びでした。お手伝いも良くして頂き保護者の方も感謝していました。 ・子ども達の競技中や演技終了後にはたくさんの拍手をくれて周りを盛り上げてくれた。走って手伝いに来てくれたり、子ども達と関わってくれて助かりました。
<p>朝の運動遊びの取り組みをどう評価しますか。また、それはどのような点からですか。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが遊びに興味を持ち日常の遊びの中で発展させていったのは良かった。どんなふうには遊べば安全に遊べるか等の指導もお話していただきたい。 ・職員も色々な運動遊びに参加しながら、参考になる遊びは取り入れていきたい。若い学生の力で子どもと触れ合いとても楽しんで遊んでいる。とても大切な経験だと思います。 ・日頃保育で取り入れない遊びを紹介してもらい遊ぶことができた。集団の中で遊んでいる子どもの様子を客観的にみて保育にいかすことができた。 ・池田先生や学生さんがしてくださる遊びが、様々な経験を含んでいるものでそれが園の遊びを活性化させてくれる。いつも遊び慣れている教師が他の人の遊ぶ姿を見て本来の遊びの楽しさに帰ることができる。 ・寒いと室内で過ごしがちなの所、楽しい遊びを考え、外遊びの楽しさを気づかせてくれている。体を十分に動かして遊ぶことで体が温まることを実感できたこと。 ・一緒に遊べることを楽しみに早く登園してくるようになっていきます。冬の寒い中でも体を使って遊ぶことの楽しさを感じてくれればうれしいです。 ・寒い時期で身体を動かして遊ぶことの楽しさがその後の保育でも活かされていった。 ・寒い時期になると動かないで部屋にこもりがちになるが、朝、体を動かすことでその後の活動もスムーズに取り組めた。
<p>今後の県大と新園の連携活動について、何かご意見がございましたら、ご自由にお書き下さい。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・具体的なものはわかりませんが連携していただけるものは続けていただけたらとも思います。 ・子どもの成長にとって基本的運動遊びは大切だと思います。学生の若さで子どもたちと一緒に遊んで成長していけたらと思いますが・・・（私の力では・・・） ・どんなふうには時間がとれるかはわからないが新園でも連携して運動遊びの時間を取ってほしい。 ・新園でも今までのような活動をしていただけたらと願っています。よろしくお祈りします。幅広い年齢の方と接することが出来ることは園児にとって有意義なことだと思います。 ・いつもいろんなところで園の活動に参加していただきありがとうございます。園の先生たちだけでは力不足なところもあり、新しい方法、新しい発見ができて子ども達にとってもいい経験になっているとおもいます。新園においても引き続き今のよう形で継続できればいいと思うのですが…。 ・新園になっても続けていただきたいです。子どもの活動の支援のおかげで子ども一人ひとりのことがわかり（体力測定）、また活動につなげているのでとても助かります。また、学生さんや先生との交流によって子ども達の笑顔がいっぱい見られるのがとても楽しみです。今後もよろしくお祈りします。 ・ぜひ新園になっても続けてもらいたいです。子ども達も増え、活動内容も変わってくると思いますが、体力測定など保護者の方にも子どものことを知ってもらえるのでお祈りします。

伝いが96.8%、朝の運動遊びは87.3%であり、保護者も参加する行事である運動会の認知度が最も高かった。一方、体力測定結果のフィードバックについては、カードは見ているが、その結果の活用度は低かった。また、図5に示すように、これら4つの連携活動への評価については、70～90%以上の家庭が「良い」「まあ良い」

と回答し、体力・運動能力測定、朝の運動遊びについては、「どちらともいえない」の回答が認められた。行事やその練習は幼稚園の方針によるものであり、それを充実させることは保護者として受け入れやすいが、子どもの体力・運動能力を評価されることや、朝の自由遊びの時間に強制的に運動をさせられること（あるいは

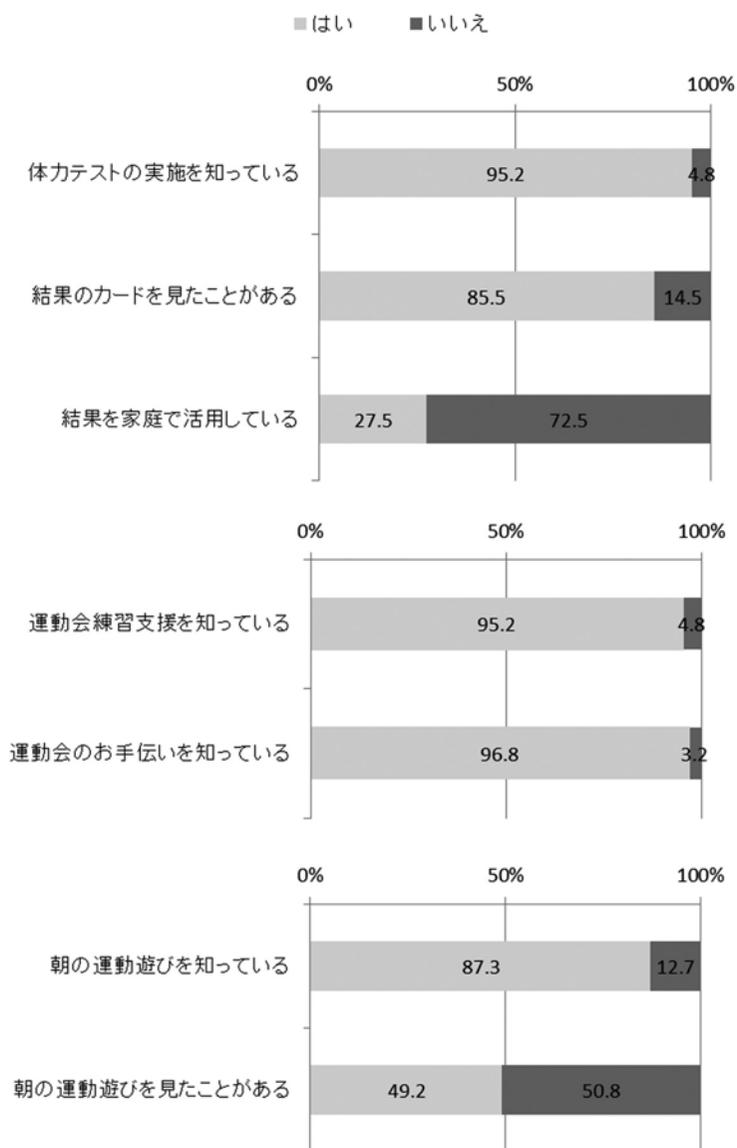


図4 保護者の連携活動に対する認知度

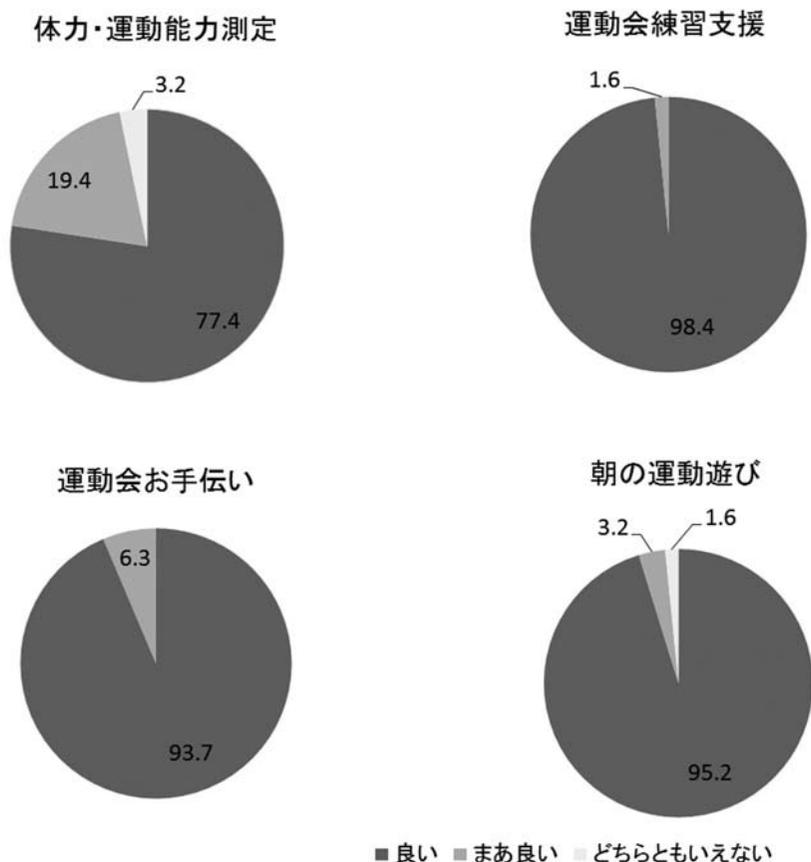


図5 保護者による連携活動に対する評価（数値は%）

早めの登園を促されること）については家庭・保護者の考え方が反映していると思われる。

IV. まとめ

福岡県立大学と田川市立幼稚園の連携活動について検証するため、身体運動に関する指導や支援活動としての行われている体力・運動能力測定、運動会の練習支援と本番のお手伝い、朝の運動遊びについて、学生、園の教員および園児の保護者を対象に調査を実施し、その評価について確認した。結果は以下の通りである。

1. 学生は、保育現場で学ぶことの意義を認識

しており、この連携活動によって充実した学びを体験できている。

2. 幼稚園の教員の評価では、4つの連携活動によって学生が現場を経験することが、子どもたちの保育に良い影響果をもたらしていることが確認された。

3. 保護者による連携活動への評価からは、活動の種類によってその認知度や評価に温度差はあるものの、概ね良い活動として認識されていることが確認された。

以上のように、これまで行ってきた連携活動についての検証結果は概ね良好なものであった。もちろん、授業内容についてはまだまだ改

善する余地があると思われるが、これらの結果からは、新たに設置されたこどもセンターにおける連携活動に対する学生・幼稚園の双方に高いニーズが存在すると読み取れる。また、本取り組みのコンセプトである「大学側からの地域への貢献活動と、その貢献活動を通じて現場で得られる専門教育に関する効果」という双方向モデルについても、十分な成果が示されたと思われる。つまり、大学の地域貢献においては、大学がその教育研究の成果をもって地域社会に何かを施すだけでなく、地域の力によって学生の育ちが支えられるという方向性も存在する。この取り組みはその可能性の一端を確認することができたと考えられる。

なお、本研究は田川市と福岡県立大学との共同研究事業の平成25年度研究助成（研究課題名「田川市新園の開設に向けた幼児教育現場での身体運動に関する教育実践と連携活動に関する研究」）の補助金を受けて実施された。

参考文献

中央教育審議会（2002a）新しい時代における教養教育の在り方について。文部科学省。

中央教育審議会（2002b）青少年の奉仕活動・体験活動の推進対策について。文部科学省。

中央教育審議会（2005）我が国の高等教育の将来像。文部科学省。

塙佐敏（2011）歩数を基にした子どもの適切な身体活動量の検討－可変要因（運動習慣、生活習慣）や不変要因（季節）と歩数との関連から－。発育発達研究, 54: 1-10.

長谷川誠（2010）大学の地域貢献に関する一考察：スポーツによる地域連携に注目して。佛教大学教育学会紀要, 9: 211-221.

古田千恵子・野井真吾・正木健雄（2002）朝の運動が

子どもの覚醒に及ぼす効果－棒反応値を指標として－。日本体育大学紀要 31(2): 101-109.

加賀谷淳子（2008）幼児の身体活動量と運動強度。体育の科学, 58: 604-609.

小林幸次・野井真吾（2012）朝の活動が子どもの覚醒度に及ぼす影響－“運動遊び”と“読書”との比較－。運動・健康教育研究, 20(1): 8-18.

水野晃秀・佐伯英人（2012）愛媛県宇和島水産高等学校水産増殖科における地域貢献活動：保育園の園児に対する出前授業の教育効果。水圏環境教育研究誌, 5(1): 24-27.

文部科学省（2012）大学改革実行プラン－社会の変革のエンジンとなる大学づくり－。文部科学省。

大西良・保坂恵美子（2013）大学の地域貢献：学生ボランティアによる地域の子どもの支援。久留米大学経済学研究, 54: 45-65.

新宅幸憲（2010）スポーツをとおした地域貢献：高齢者と幼児の立位姿勢に着目して。びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 8: 11-17.

杉浦弘子・木下博子・藤本保（2012）小児の四季の歩数調査。小児保健研究, 71: 242-249.

田中沙織（2009）幼児の運動能力と身体活動における関連について－5歳児の1日の生活からみた身体活動量を中心として－。保育学研究, 47: 112-120.

田中孝国・飯島道広・山下進・田中昭雄（2008）小学生を対象とした地域貢献活動のあり方。高等専門学校教育と研究（日本高専学会誌）, 13(1): 29-32.

八木一正・畠山真也・久坂哲也（2002）地域の子どもたちに豊かな科学的体験を！－角度から高さを求める実験を例に－。岩手大学教育学部附属研究実践総合センター研究紀要, 1: 115-125.

山中文・石橋由美（2004）保育士養成カリキュラムにおける公民館連携学生ボランティア活動プラン。新見公立短期大学紀要, 25: 135-141.